

SHOW HEY シネマールーム

★★★★

ウイスキーと2人の花嫁

2016年 / イギリス映画

配給：シンカ / 98分

2018 (平成30) 年2月22日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督：ギリズ・マッキノン

原作：コンプトン・マッケンジー

出演：グレゴール・フィッシャー /

ナオミ・パトリック / エリ

ー・ケンドリック / エディ・

イザード / ショーン・ピガー

スタッフ / プライアン・ペテ

ィファー / ケヴィン・ガスリ

ー / ジェームズ・コスモ

👁️👁️ みどころ

本作の原題は『WHISKY GALORE!』で、1949年のオリジナル版のリメイク。原題の意味は、「たっぷりのウイスキー」という意味だが、私には原題より邦題の方が本作にピッタリ！

座礁した貨物船の「実話にもとづく物語」は、沈没したトルコのエルトゥールル号を描いた『海難1890』（15年）も同じだが、シリアス性はまったく異質。本作は「人命救助」ではなく、「ウイスキー救出作戦」と2人の花嫁をテーマにした映画で、あくまでユーモラスだ。そして、それに対応して、「手入れ」に入る役人たちも、少し間抜け風でユーモラスに・・・。

国家財政のあり方を真剣に考えれば、これで本当にいいのと思わなくもないが、そこはまあ中国流に(?)「上有政策、下有対策」とまとめておこう・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■こんな「悲劇」がユーモラスな映画に！■□■

本作は、実話にもとづく物語。その実話とは、第二次世界大戦中にスコットランドのエリスケイ島沖で起きた貨物船SSポリティシャン号座礁事件のことだ。SSポリティシャン号がドイツのUボートを避けるべく、リバプールからアウトター・ヘブリディーズ諸島へ北上していき、ミンチ海峡から大西洋へと抜けようとしていた時に、入ってはいけないエリスケイ海峡に入ってしまったために、座礁してしまったらしい。なるほど、なるほど。しかし、そんな「悲劇」がなぜこんなユーモラスな映画に・・・？

■□■人命救助の後の積荷は？こんな原作あり！■□■

私は子供時代に『ロビンソン・クルーソー』（『ロビンソン漂流記』）を心躍らせながら何度も読んだが、そこでは乗っていた船が沈没したことによって命からがら無人島に流れ着いたロビンソン・クルーソーが、船が沈んでしまわないうちに船内からどんな積荷をどれくらい島に持ち運ぶか、が生き残るための重要なテーマになっていた。

それと同じように（？）、座礁したSSポリティシャン号を見た島の住民たちは、最優先とされた乗組員の救助に全力を尽くした後、船内の積荷を調べると、そこにはピアノやバイクの部品の他、2000万ポンドにもものぼるジャマイカポンド、さらに5万ケースを超えるアメリカへの輸出用ウイスキー等が積まれていたからビックリ。この金額は当時のジャマイカにおける流通高を超えていたが、これは万が一、ヒトラーが英国に侵攻してきた場合に備えて王室をジャマイカへ避難させる計画のためだったと言われている。

そして、イギリス人作家コンプトン・マッケンジーは、そんなネタをテーマに、1947年に小説『Whiskey Galore』を発表したそうだ。なるほど、なるほど…。

■□■1949年のオリジナル版をリメイク！■□■

そんな実話とそんな原作を1949年に映画化したのが、アレクサンダー・マッケンドリック監督の白黒映画『WHISKY GALORE!』（その意味は「たっぷりのウイスキー」）。スコットランド西岸の島のアウトター・ヘブリディーズ諸島のルイス島で生まれ育った本作のプロデューサーであるイアン・マククリーンにとっては、そのリメイクは長年の夢だったらしい。

他方、本作の監督であるギリーズ・マッキノン（原題）は初作品『Passing Glory』でファースト・スコティッシュ賞を受賞した時、オリジナル版の監督であるアレクサンダー・マッケンドリックから賞を受賞されたこともあって、1949年のオリジナル版に興味と敬意を持っていたため、本作のリメイクに意欲満々。なるほど、なるほど…。

私は近時試写室でよく会っている映画評論家の友人である武部好伸氏から、自著『ウイスキーアンドシネマ2 心も酔わせる名優たち』（17年・淡交社）の贈呈を受けた。ここでは48本の映画の中に出てくるさまざまなウイスキーをテーマとして、彼の「映画愛」と「ウイスキー愛」にあふれた解説がなされている。そんな彼なら本作の鑑賞は絶対だし、次の本には必ず本作を取り上げるはずだ。私自身はウイスキー党ではないが、そんな縁もあって、「本作は必見」と映画館へ。

■□■邦題に注目！島民に注目！習慣に注目！■□■

本作の原題は『WHISKY GALORE!』だが、邦題は『ウイスキーと2人の花嫁』。その邦題どおり、本作には長女ペギー・マクルー（ナオミ・パトリック）と次女カトリーナ・マクルー（エリー・ケンドリック）を持つ、島の郵便局長をしている父親ジョセフ・マクルー（グレゴール・フィッシャー）が最初に登場する。ジョセフは長女のペギーが恋人のオッド軍曹（ショーン・ビガースタッフ）と、次女のカトリーナが恋人の教師アンガス（ブライアン・ペティファー）と結婚式を挙げるのを楽しみにしていたが、ナチス・ドイツが引き起こした第二次世界大戦が激しさを増す中、島では島民たちがこよ

なく愛するウイスキーの配給が完全に止まってしまったから大変。この島ではウイスキーなしでの結婚式はできなさそうだから、このままでは二人の娘の結婚式も無理・・・？映画の冒頭にそんなテーマが提示されるが、さてあなたなら、娘の結婚式への希望を優先？それとも、ウイスキーがなければ挙式はできないという島の習慣を優先？

現在日本では、安倍内閣のもとで「働き方改革」が議論されているが、座礁した船から人命救助するには、時間外勤務もへったくれもないのが当然。縁もゆかりもないトルコのエルトゥールル号が遭難した時に、その乗組員たちを救助した実話は『海難1890』（15年）（『シネマルーム37』200頁参照）に描かれていたが、それはまさに島民たちの不眠不休かつ命懸けの作業だった。しかし、本作ではあえてその人命救助のリアルなシークエンスは描かず、船内に大量のウイスキーが残っていると知りながら、安息日の習慣を守るため、午前0時まではウイスキー救出作戦を延期する島民たちの律儀な姿（？）が描かれる。なるほど、なるほど・・・。

しかし、これってちょっと馬鹿げているのでは・・・？そう思わなくもないが、島民のみんながクソ真面目に安息日やその他の島の習慣を守っている姿は、ユーモア感でいっばい・・・。

■□■役人の任務は？島民と役人との対決は？■□■

本作に登場するのは善人ばかりで、唯一の例外（？）は、ウイスキーを押収しようとする関税消費庁の役人と、それを指揮するワゲット大尉（エディ・イザード）だけ。島民たちにSSポリティシャン号の積荷である大量のウイスキーを島内に運び込まれて飲まれてしまったのでは、国家の財政に大きな損失が！そんな義務感を持ってウイスキーの回収任務に当たる役人にとっては、ウイスキーを隠したり、関税消費庁の作業に抵抗・妨害する島民は敵。役人を指導するワゲット大尉はそう思っているはずだが、スクリーン上に登場する大尉はどことなく大らかかつユーモラス・・・？本作中盤のストーリーは、島民たちの一致団結したウイスキーの「隠匿ぶり」とそれに振り回されるワゲット大尉たちとのドタバタ劇になるので、それに注目！

山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズが49作も続いたのは、何事も本人なりには真面目に一生懸命やっているフーテンの寅さんの行動が、周りの人々や観客にとってはユーモラスで良質な（？）笑いを誘ったため。それと同じように、本作では少子高齢化が進む中（？）、島の伝統と習慣を守りつつ、他方でウイスキーを愛飲するのを決してやめることができない島民たちの必死の行動に、どことなくユーモアと笑いが・・・。役人との対立はとことん現実を見つめていけば、先日観たキャスリン・ビグロー監督の『デトロイト』（17年）のような血なまぐさい事件に発展してしまうが、本作のようなユーモラスな解決ならOK・・・？これぞまさに中国のことわざにいう「上有政策、下有対策」・・・？

■□■法の規制は？1949年v s 2018年■□■

私はオリジナル版が制作された1949年に生まれ、本作が公開された2018年に本作を観たが、その69年の間に映画製作にもさまざまな法的規制がかけられるようになっ

てきた。その代表は著作権で、それを核とするあれこれの法的規制がかかる中、今やスクリーン上にウイスキーのラベルやブランド名をハッキリ見せることはダメとされている。これはオリジナル版製作の当時には考えられなかったことだから、本作の製作にはいろいろと苦労があったらしい。前述した武部氏は自著の中で、実に細やかに各作品に登場するウイスキーのラベルを観察していたが、彼なら本作に登場する大量のウイスキーのラベルやブランドをどう分析するのだろうか・・・？

2018（平成30年）年2月28日記